

創立 100 周年記念事業資金募集について関係各位にお願い

公益社団法人日本農芸化学会

前会長 松山 旭

会長 西山 真

【序文】

日本農芸化学会は、1924（大正 13）年に設立され、来る 2024（令和 6）年 7 月 1 日に創立 100 周年の記念すべき時を迎えようとしております。我が国の農芸化学は、先輩諸氏のたゆまざる努力によって、生命現象についての化学的な解明を推し進めると同時にその成果を基盤とした応用技術を発展させ、生物生産の分野において他に例を見ない独自の学術体系を形成するとともに、多くの顕著な成果を挙げてまいりました。

こうした研究分野に携わる研究者、技術者等で組織された日本農芸化学会は生命科学とその応用を担う中核学会として、現在、総数約 1 万名の会員を擁する我が国有数の学会に発展しております。この分野の人材を育む全国の大学においては学部学科の改組、改称等が行われたものの、本会は「農芸化学」の名称を堅持し、分野間の垣根のない横断的な研究領域を包含する組織として広く認知され、求心力を誇る存在となっています。

近年の化学と生物にかかわる国内外の科学と技術の進歩は、もはやこれまでの概念をもってしては包括しえない広がりをみせており、ゲノム編集、オミクス解析、データ科学や人工知能なども取り入れながら、これまで以上に人類社会への貢献に資する研究が進められています。このような新しい潮流の中で、化学と生物に基盤をおく日本農芸化学会は、真理の探究を目指した学術研究のさらなる深化にとどまらず、産業の振興や地球規模の課題解決に大きく貢献することが期待されています。そのため、2012 年には公益法人化し、さらに 2017 年には公益財団法人農芸化学研究奨励会との合併を実現して、透明性の高い組織運営と財務基盤の安定化を図ってまいりました。

このたび、創立 100 周年を迎えるにあたり、本会は「FUTURE 農芸化学 100」と銘打った記念事業を計画いたしました。これは、農芸化学分野の未来の礎となる若手研究者の長期的な育成・強化を目的とするものです。これから農芸化学領域の研究開発を担っていくべき大学院博士課程学生数の漸減傾向は、当学会としても看過できない大きな課題であると認識しております。そこで、学会創立以来の 100 年を俯瞰することを目的とした記念事業とは一線を画し、将来の農芸化学のさらなる発展を目指した未来への投資として、大学院生を含めた若手研究者の研究活動を支援し、若手研究人材基盤を厚くすることを目的とした支援を行います。つきましては、2025 年 3 月末日までを募集期間として皆さまのご支援を賜りたく、特別支援の釀金をお願い申し上げます。何卒、関係各位の絶大なご理解とご協力を賜りますよう切にお願い申し上げます。

【目標金額】

若手研究者研究環境基盤支援基金として、募金目標額を 50,000,000 円とし、会員の皆様並びに本会に関係する諸団体様からご寄付をお願いする次第でございます。一口 10,000 円として、団体会員・賛助会員、関係する諸団体様からは 5 口以上任意で、個人会員からは 1 口以上任意でお願いいたします。

【事業概要】

「FUTURE 農芸化学 100」記念事業 概要

本会は創立 100 周年を迎えるにあたり、ダイバーシティとインクルージョン、学術活動のグローバル化が一層進む次の 100 年に向けて農芸化学分野の発展の礎となる若手研究人材基盤の育成を目的とした記念事業を進めます。具体的には、農芸化学領域に関わる大学院博士後期課程の学生と博士号を取得後 10 年以内の若手研究者を対象者とし、研究の発展や成果の創出の支援（以下に例示）に焦点を当てた事業を進めます。また、初めて研究室を立ち上げた研究者に対しては、スタートアップのための環境整備費用を年齢にかかわらず応募可能として支援します。毎年、募集・審査の上で年間総額 500 万円程度、およそ 10 年間継続可能な支援事業として次世代の農芸化学分野を担う研究者を応援します。

若手研究者（大学院博士後期課程の学生と学位取得後 10 年以内の研究者）

- ・国内外の研究機関への短期滞在費用
- ・国内外の学会への参加費用
- ・論文作成や投稿・掲載費用
- ・その他、若手研究者育成目的の費用

初めて研究室を立ち上げた独立後 2 年以内の研究者

- ・研究室スタートアップのための環境整備費用